

カマキリとぼく

里庄町立里庄東小学校

四年生 宮 拓実

大きな二本のカマがかっこいい。ギザギザしたするどい刃は、動きの速いバッタもにがさない。ずっと見ていたいくらいだ。

ぼくは、二〇一六年の夏から、カマキリを二年くらいかっている。きっかけは畑仕事の手伝い。夏休みになると、じいちゃん、ぼくに、

「夏休みじゃろ。畑の手伝いをせえ。」

と言う。ああ、今日も見つかったという気持ちだった。

「草取りじゃ。」

じいちゃんの言うことは絶対だ。ぼくは、しゃがんで草取りを始めた。根っこが、土のおく深くまでのびているのか、全然ぬけない。最悪だと思っていると、だれかに見られている感じがした。じいちゃんは、向こうで草をかっているからちがう。で

も、やっぱりだれかに見られている。変な感じがするなあと、横を向いたとき、それがだれだかわかった。

「見いつけた。」

カマをたたんで、顔の横にかまえたポーズで、ぼくのことをじっと見ていた。

「おお、お前か。」

思わずカマキリに話しかけていた。むねの辺りをそっとつかんで、手のひらに乗せてみた。カマキリは、ぼくのうでをよじ登って顔の方に来た。

「くすぐりたい。」

カマキリが、ぼくにじゃれているような気がして、かわいくなった。ぼくは、きゅうりの入ったふくろの中に、カマキリをそっと入れた。

「ちよっと待ってて。」

ぼくは、急いで草をぬいた。今日の草取りは楽しいと思っていたら、じいちゃんが来た。

「ようぬいた。帰ってええで。」

「きゅうりのふくろ、持って帰っとくな。」

ぼくは、きゅうりのふくろからカマキリを出して、肩に乗せて帰った。その日から、ぼくとカマキリの生活が始まった。

毎日、えさにするバッタを取りに行った。バッタを取りに行

くと、カマキリにもよくそうぐうした。ぼくはそのたびに、カマキリを連れて帰った。チョウセンカマキリ二ひき、オオカマキリ一ひき、コカマキリ一ひきの四ひきとくらした。図かんでえさのことやかい方を調べた。みんな部屋は別々にした。共食いはカマキリの世界では自然なことかもしれないけれど、ぼくは見たくなかった。だから、ダンボールをくりぬいて、あみをはりつけて個室を作った。草を入れて完成。えさは、バッタを取りに行った。一日一ひきずつあげた。なかなかバッタが取れなくて、妹や母さんにも手伝ってもらった。じいちゃんも取ってきてくれた。みんなが手伝ってくれた。水は一日二回、きりふきでやった。顔やしょっ角についた水てきを、カマで上手にかき集めて口に運ぶ、首をかしげるすがたがかわいい。ぼくは、一日のほとんどをカマキリとすごしていた。

秋祭りが終わったころ、カマキリたちがたまごを産み始めた。みんなめすだった。時間をかけてゆっくりゆっくりたまごを産んだ。あわのようなものを出して、ダンボールのかべに産んだ。何となく、もうお別れかなと思った。コカマキリは、その後しばらくして動かなくなった。

冬が近づいても、残った三ひきは元気だった。でも、えささがしに苦労した。バッタだけでなく、えさになりそうな虫がない。ぼくは、とりのもも肉、ご飯、パンなどいろいろためし

たが、カマキリたちが一番好きだったのは、ねこ用のえさ、とりのささみをやわらかくしたもので、竹ぐしにつけてあげた。カマキリたちは、二本のカマで竹ぐしをがっしりとかんで、もりもりとねこのえさを食べた。ぼくは、ほっとしたのと同時に、何だかおもしろく思えた。カマキリがねこのえさをおいしそうに食べているすがた、かわいい。

でも、ぼくたちの生活も、ずっとは続かなかった。カマキリたちが、あまりえさを食べなくなって、動かなくなってきたからだ。年が明けると、続けて二ひきと別れることになった。かくごはしていたけれど、悲しくてなみだが出た。助けてあげられなかった。冬休みが始まる二日前、最後のカマキリが動かなくなった。この子は、最初に畑で見つけたカマキリだった。左手に乗せて、せなかを指でなでた。

「ごめん。助けてあげられん。」

そのとき、カマがゆっくり開いて、ぼくの左手の親指にカマをかけた。そして動かなくなった。悲しかった。何日かして、カマキリのお墓を庭に作った。ぼくは、カマキリの本をたくさん読んだ。

そして、春が来た。あの子が産んだたまごから赤ちゃんがたくさん生まれた。新しい命。命はつながっているんだね。